

グローバル教育の再定義を

大学の持続可能性を高める視点から

日本が抱えてきた グローバル教育の課題

コロナ禍によりいまだ続く渡航制限。影響を受けなかった大学はないと思いますが、APUにとってそれは、教育の根幹を揺るがす非常事態でした。本学の最大の特徴は、多様な国・地域の学生が、正課、正課外問わず膝を突き合わせて学ぶ「混ぜる教育」です。国際教育寮での共同生活をはじめとした生身の交流は、対面であることが大前提。オンラインという選択肢の重要度が高まる中、学生にいかなる体験を与えればグローバル教育と言えるのかを見直すきっかけになりました。学生の半分を占める^{*1}国際学生2500人のうち、およそ1000人はまだ入国できません。日本人学生の海外派遣もコロナ前と比べ激減しています。今も、試行錯誤は続きます。振り返るとグローバル人材育成は、コロナ禍以前から多くの課題

を抱えていました。大学では国際系学部や留学担当部署など一部の組織が、一部の学生を対象に行う域にとどまっています。国際系学部で女子学生比率が高い理由の一つは、法学、経済学、工学といったメジャーな分野から女性が排除され、国際系に活路を見出さなければならぬ、という日本社会の悲しい力学です。女性が活躍できる分野はまだまだ限定的です。加えて、世界でアジアの存在感が増し、日本はそこに活路を見いだすべきなのに、大学の協定校は欧米中心。英語教育も欧米人との交流を念頭に置いたため、学生は「正しい英語が話せない」との劣等感を持つばかりで自己効力感が低く、留学生との交流も進みません。異文化理解も、各地域に特徴的な思考・行動のパターンを知識として学ぶことが主で、それを実感する機会に乏しい。私も含めグローバル教育を担当する教員が、かつて欧米の大学に留学して学んだ体験

を、時代が変わっても再生産しようとしてきたことが、大学のグローバル教育を頭打ちにしているように思います。APUはある意味、この課題への一つの打開策として設立された大学です。APUのような教育が、いまだ日本では「異端」なのは、課題が解決されていないことの裏返しではないでしょうか。

グローバル化すべきは 学生よりもずわれわれ

グローバル教育は、再定義が必要な時期を迎えています【図表】。学生にとって大学は本来、多種多様な人、文化が集まる環境で自己を開放して試行錯誤を繰り返して、新しい自分を発見し、思考パターンや価値観をブラッシュアップする場であるはずですが、これはまさに、グローバル教育がめざす姿だと

立命館アジア太平洋大学副学長
学校法人立命館理事
米山 裕
よねやまひろし ●1991年カリフォルニア大学大学院ロサンゼルス校歴史学専攻修士(史学)取得。東洋女子短期大学欧米文化学専攻教授、立命館大学文学部教授を経て、2020年立命館アジア太平洋大学に着任、現職。

と思います。つまりグローバル教育は、全員対象の、大学教育のコアに据えられてしかるべきです。そのためには、まずわれわれがグローバル化することです。大学の役職者が先陣を切り、欧米に限らず世界全域に対してオープンな姿勢に改める必要があります。そこが変われば教職員が変わり、教職員が変われば学生も変わります。全学的な意識改革には時間が

グローバル教育の再定義の例

	これまで	これから
位置付け	国際系学部、プログラム限定	大学教育のコア化
教育の目的	スキルの習得	思考パターンや価値観の転換
教育手法	正課、留学中心	正課+正課外(キャンパス自体を多文化キャンパスにし、交流できるしくみづくり)
コミュニケーション	正しい英語の習得	自分なりの言語能力で多様な人とフラットに付き合える
異文化理解	知識としての学習	人間同士の直接的な交わりによる体験
オンラインの活用目的	対面授業の再現	オンラインならではのインタラクティブな学び、国際FD、国際サークルetc.
留学生の捉え方	特別な扱いが必要な留学生	日本人学生と同じ「学生」
ベンチマーク	国内の大学	海外の大学

*取材を基に編集部でまとめ

かかります。国の補助金事業を待つのではなく、まず自分たちの意志で始めなければなりません。学内の一部の組織にグローバル教育を任せる体制も見直す時でしょう。例えば日本人学生と留学生の交流が進まない主な要因は、留学担当部署だけで留学生への教育を考えているからです。日常的な交流をめざすなら、学部の教授会が日本人と留学生の混ざり方を検討してよいはず。グローバル教育が全学で取り組むものとなった暁には、「国際」や「留学」と名の付く部署はなくなっているかもしれません。教育は、海外の方が速く、大きく動いています。世界に開かれた国際水準の教育を行うためには、海外の大学との交流は欠かせません。コロナ禍を経てAPUもオンライン会議システムの利便性を知り、先日国境を越えた^{*2}FDを、シンガポール経営大学(SMU)と行いました。反転授業の事前学習用に質問が組み込まれたインタラクティブな動画がつけられているなど、先方の先進性に目を見張りました。日本なら導入の検討に5年ばかりかかろうな技術を、まずは導入し、実装しながら改善しているのです。このままでは日本の高等教育は取り残されます。

10年後も持続発展する 世界へ開かれた教育を

人口減少や市場でのシェア低下をふまえると、世界における日本の存在感は10年も経たずに極めて薄くなるでしょう。企業ではすでに既存の経営手法が通用しなくなっています。大学も同じです。進学希望者を全て受け入れても定員を満たせない時代は目前であり、このままでは衰退しかありません。生き残るには、海外からも若者が集まる世界に開かれた学びの場となり、そこで学ぶ日本人学生も世界に飛び出すことが必要です。大学を通じて日本社会全体を世界に開くことが求められます。無論、APUも例外ではありません。オンラインを活用した日常的に世界とつながる授業の実施、国際教育寮の増設、多文化環境を生かした既存2学部の改革、持続可能な開発と観光を通じて地域の価値を高めるサステイナビリティ観光学部(仮称)の開設など、2023年4月に大規模な教学改革を行います。めざすのは、APUで学んだ人たちが世界を変えることです。世界に開かれた多様なふれるグローバル教育が、大学を持続させ、日本を、世界を、持続させることと信じています。

*2 教員研修

*1 在留許可証が「留学」の学生

取材・文/見山雄介 撮影/タケウチモユキ